
形成期のオリヤ・アイデンティティ

1867年から1870年のオリヤ語論争について

Oriya Identity in its Formative Phase :
On the Oriya Language Controversy, 1867-1870

杉本 浄*

SUGIMOTO Kiyoshi

キーワード：近代オリッサ史，オリヤ語論争，オリヤ・アイデンティティ，
英領インドにおける地域意識形成

KEY WORDS: modern history of Orissa, Oriya language controversy, Oriya identity,
formation of regional consciousness in British India

The aim of this paper is to examine the formative phase of Oriya identity, discussing the Oriya language controversy during the short period of 1867-1870 in coastal Orissa or Orissa proper (ceded to the East India Company in 1803).

The Oriya language controversy began with a series of negative suggestions on the status of the language made by British officers and Bengali intellectuals. They treated it as language yet to be standardized and thus to be assimilated into the more advanced Bengali. The educated Oriya intellectuals tried to deny the allegations and strengthen the independent status of the Oriya language mainly through their newly floated Oriya newspapers. It was precisely at this moment that a few Oriyas began to form their Oriya identity.

In this study the main stress falls on the ambiguous situations surrounding a restricted number of Oriya intellectuals who played a decisive role in carving out an Oriya identity. As Oriya was still immature as a modern language, these selected intellectuals stood on the boundaries of Oriyas and Bengalis in more than one sense. These marginal few had a scope for identifying themselves as Oriyas. In fact they managed to attain to their Oriya identity by regarding Bengalis as others during the controversy.

This is a part of a lengthy saga leading to the formation of the province of Orissa (1936). The subsequent phases like the dissemination of Oriya identity, the Oriya nationalist movement and the formation of a separate statue for Oriyas should be dealt with in another paper.

*東海大学研究員 Research Fellow, Tokai University

はじめに

本論はオリヤ・アイデンティティの初期形成を、ベンガル語への同化に対抗するオリヤ語論争 (*Odia Bhasa Andolan*) を通して分析し、その形成過程についてオリッサとベンガルとの関係性に注目することによって再検討を試みるものである。

ここで取り扱う「オリッサ」の範囲は、沿岸平野部に位置するオリッサ本土で、それは1803年にマラータのボンスレー家からイギリスの東インド会社に譲渡された部分にあたる。当時の行政地図によれば、ベンガル管区のオリッサ地方にあたり、地方長官 (Commissioner) による統治がなされていた [図1 A, B]。

オリッサ本土では19世紀後半から、複数の行政区に分かれて統治されていたオリヤ語の話者領域を統合して、単一の行政区を設ける提案がオリヤ人識字層 (オリッサのコンテクストではパラモン、カンダヤート、コロノといったカーストからなる) を中心になされた。この動きは19世紀末にオリッサ地方に隣接する中央州、マドラス州といった、オリヤ語話者が多数存在するとされた他の行政地域にも波及し、さらに1903年には統合運動の中心を形成したウトカル (=オリッサ) 統一協議会 (*Utkal Sammilani*) の設立に至った。その後も、度重なる請願運動のすえに、1936年のオリッ

サ州の誕生において大団円を見たのである。さらに、1947年のインド独立以後、周辺の藩王国を併合することによって現在のオリッサ州が完成した [図1 C]。

従って、ベンガル語への同化を拒みオリヤ語の存在を主張した「オリヤ語論争」は、オリッサの統合へ向けた動きを導き出した重要な契機とされ、オリヤ・アイデンティティ、つまり自らを「オリヤ人」として規定することの出発点と見なされてきた*1。

オリッサの統合運動／ナショナリズム／アイデンティティに関する研究は1990年代を通して、インド内外のナショナリズム論やエスニシティ論の視点を取り入れながら、従来の民族主義的な歴史記述 (nationalist historiography) を見直す形で展開してきた。その特徴はこの運動を政治的な現象というよりも文化的現象として取り扱い、オリヤ・アイデンティティという術語を用いて、その共有意識が植民地制度の下でどのように形成・拡大されたのかを説いたところにある。こうした試みは民族主義的な歴史記述に特有な、オリヤ語の固有性や本来性や自然性に基づいてアイデンティティが想起されたとする説明やオリヤ人／語の一体性や実体性を議論の前提とする考え方を一端廃し、可塑的なものがどのように実体的なものとして捉え直され、共有されたのかを明らかにした。つまり、歴史、文化、言語の一体性に支えられたオリヤ・アイデ

* 1 例えば、Mohapatra, P. [1997], Mohapatra, B. N. [1990, 1996], Mishra, P. K. [1979, 1986], Mohanty, N. [1982] など。なお、本稿で取り扱うオリヤ・アイデンティティの範囲は英領統治下で言語を中心に形成され、先鋭化されたものに留める。こう指摘しておかなければならないのは、オリヤ・アイデンティティが英領統治期に発したのではなく、それ以前に遡れるという議論があるためである [Kulke, H. 2001]。本稿は「言語の同一性」によって領土を主張するアイデンティティに着目するものであり、それがいついかなる状況を通して成立したのかに絞って論じるものである。英領統治以前のオリヤ・アイデンティティとの継続と断絶についての考察は別稿に譲りたい。



図1 A 現在のインドとオリッサ州 出典：Census of India 1991, Orissa

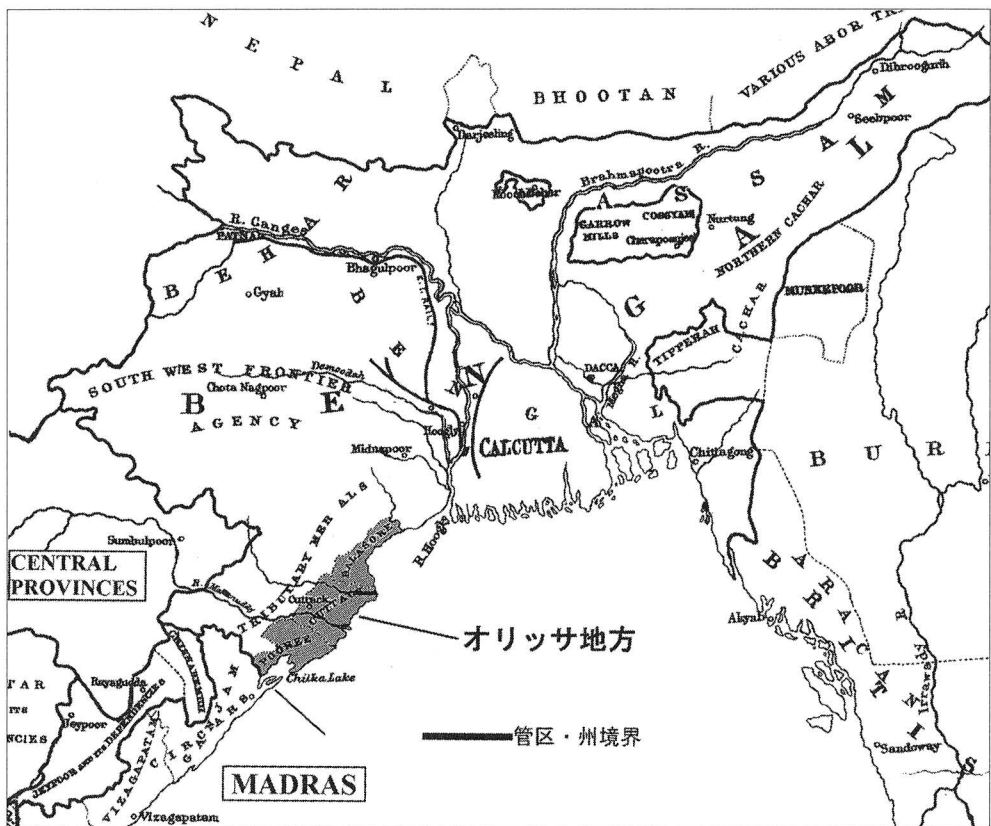


図1 B 1868年のベンガル州とオリッサ地方 出典: Chesney [1868] をもとに加筆・修正



図1 C 現在のオリッサ州と1868年のオリッサ地方の範囲 出典: 著者作成

ンティティや「オリヤなるもの」が所与のものでなく、作為的なものであり、そうして得られた一体性の記憶を再構成することによって広められたその過程や構造に焦点をあてた。

こうした昨今のオリヤ・アイデンティティの非実体性に着目する研究は、あえて単純化して言えば、アイデンティティが時代や社会状況の変化において流動していくという、同時代のナショナリズム論やエスニシティ論の反映であり、これらの成果を歴史の枠組みにどう組み込むかを試みたものであった。例えば、P.モハパットロは従来の研究で述べられた「オリヤ人」が「合理的な、首尾一貫した、本質的な、前から存在するコミュニティという観念を民族主義的レトリックと共有している」と批判することを出発点に「その両義性や可変性や他のアイデンティティとの相互作用を検討する」必要性を説く [Mohapatra, P. 1997]。

また、オリッサの有名な伝説、*Kanchi-Kaveri* を通して19世紀後半と20世紀初頭におけるオリヤ・アイデンティティの構造分析を試みたB.N.モハパットロは、「このアイデンティティが多かれ少なかれ変化しないままである」原初主義者の見解（ここには様々な民族主義的な言説を含むのであるが）を本質主義的であるとし、「アイデンティティの自然な出現と開花という矛盾しない直線的な物語」としてオリヤ・アイデンティティが捉えられてきたことを非

難する [Mohapatra, B. N. 1990, 1996]*²。

本稿は基本的にはこうした論点を引き継ぐものであるが、アイデンティティが可変的であり、変化するものとして捉えるのであれば、その出発点をまずより詳細により注意深く検討することが重要であると考えられる。上述した2人の論点にはこの点が不足しているように思われる。しかも、その時代の文脈に沿う形でオリヤ・アイデンティティのあり方を再現する必要がある。さらに生成の場におけるアイデンティティを検討の枠組みに加えることによって、オリヤ・アイデンティティの各時代に即した変化を追う可能性が開かれるのである。

また、近年のインド近代史においては、植民地統治の影響のもとで19世紀後半からカースト、宗教、地域などに基づいたアイデンティティが、インド人エリート層の間でいかに構築されたのかが問われた。特に日本においては、言語を基盤としたアーンドラやグジャラートの地域的アイデンティティの形成に関する手堅い研究が行われている*³。これらの研究と本論との共通点は、タミル語、マラーティー語、ベンガル語といった植民地の中心に位置し、近代語の発展において先んじていた言語集団とそれぞれテルグ語、グジャラーティー語、オリヤ語といった後発的な言語集団が同じ行政区内で対抗関係を築き、地域的アイデンティティを結束していったことに焦点をあてたことである。また、こうした研究と比較した場合、オリッサの特徴は1) エリー

* 2 具体的に彼らの批判の対象となった研究は Mahatab, H. [1957], Patra, S. C. [1979], Mishra, P. K. [1979], Mohanty, N. [1982], Mohanty, B. [1989] などである。

* 3 アーンドラに関しては山田 [1994, 1999], グジャラートに関しては井坂 [1999, 2000] がそれぞれ検討している。

ト層の規模がかなり小さく、官吏や教師によって構成されていたこと、2) 対抗関係とされてきたベンガル人との関係が実際はかなり見えにくいこと、3) それ故にベンガル人との対抗関係は複雑で微妙で紆余曲折に富むものとなったが、本論で取り上げるオリヤ語論争のように、時に鋭く顕在化することもあったこと、などである。

以上のような課題や研究状況において、本稿では1860年代の後半になぜオリヤ・アイデンティティが言語を媒介として浮上し、なぜそれが特定の場所で特定の人間に生じたのかを、オリヤ人とベンガル人との関係性に着目しつつ検討する。具体的にはオリヤ・アイデンティティを強く抱いた人物が、実際は両者の境界に立つ両義的な人物であったことを分析の枠組みに加え、なぜ彼らによってオリヤ・アイデンティティがはじめて提起されたのかを追究する。

本稿ではまず、オリヤ語論争の口火がオリッサの地方長官ラヴェンショウによる教育言語をオリヤ語に一律化する提案にあった事実を確認し、後にオリヤ人と特定の流入ベンガル人が言語をめぐる対立することになるさまざまな要素を、彼の提案を通してあらかじめ整理する。つまり、活版印刷を通したオリヤ語の近代語としての立ち遅れといった状況だけでなく、ベンガル語との類似性やベンガル語出版の急速な成長がますますオリヤ語の地位を危うくしていた事実が検討される。さらに、イギリス植民地統治初期からのベンガル人の移動、およびベンガル人がイギリス人とオリヤ人との間の中間的な権力を掌握する過程が検討される一方で、ラヴェンショウ就任時点におけるオリヤ人識字層の対ベンガル人／語

への態度は全く曖昧であったことが、カタク出版社の設立過程を通して明らかにされる。

次にオリッサ地方一帯を襲った大飢饉から社会改革の意識が強まった過程を追い、ラヴェンショウの提言に対するイギリス人官僚の反論が、オリヤ語の地位を揺るがし、オリヤ人識字層の危機感を煽った状況を見ていく。このオリヤ語の地位の否定に過剰に反論したオリヤ人がそれ以前の漠然としたオリヤ語へのアイデンティティをベンガル語との対抗の中でいかに先鋭化させたかがここで問われる(オリヤ語論争の第1局面)。

さらに、オリヤ語をベンガル語に同化しようとするベンガル人が現れ、それをめぐる議論が展開されたオリヤ語論争の過程を追い、ベンガル語の否定においてオリヤ・アイデンティティが確実なものとなった過程について触れる(オリヤ語論争の第2局面)。

最後にオリヤ語論争において決定的な形となったオリヤ・アイデンティティがオリヤ人／語とベンガル人／語との境界的な人物によって提起されたことを、2人の重要人物を通して検討する。さらに、この初発の、まだ共有化される以前のアイデンティティの構造とは何であったのかについて、オリヤ語論争を総括する中で考察を深めたい。

1. 問題の所在——ラヴェンショウの提言（1865年）とオリヤ語論争の背景

1. 教育言語に関するラヴェンショウの提言——オリヤ語への一元化とベンガル語の排除

1865年7月にラヴェンショウ (T. E. Ravenshaw, 在任1865 - 1878) は、オリッサ地方長官として着任した。彼は直ちに過去1年間の教育状況とその展望に関するベンガル政府宛ての報告（9月12日付）を提出し、その最後に重要な提言を書き加えた。ラヴェンショウは「より年次の高い学級でオリヤ語が全く軽視」され、その代わりにベンガル語が広く用いられていることに注意を向け、この原因として（1）適切なオリヤ語の教科書が不足していること、（2）彼の視察した学校の生徒の割合がオリヤ人1に対してベンガル人5と著しく不均衡である点をあげた。

そのうえでラヴェンショウは、オリヤ語の教科書を導入するために「ベンガル語本をできるだけ完全に排除する措置が、いろいろと講じられるべきである」とし、ベンガル語を徹底的に締め出すことによって、オリヤ人のために学校教育への道を開くことができるという見通しを提示した。彼は

教育言語を一律化することによって、オリヤ人のために学校教育を促すことができると考えたのである。

さらに、ラヴェンショウはそれまで劣位にあった「オリヤ語がベンガル語と同じ能力を有する」ことを強調し、全面的にオリヤ語の地位を保証した。しかも、オリヤ語はオリッサ地方だけでなく、北はメディニプルから南はマドラス管区のガンジャム、西は中央州のサンバルプルにまで「話されている」とも指摘した。その一方で、彼はカタックに高等学校あるいはカレッジ・クラスを設立することを強く主張し、それまで植民地行政の中心地カルカッタへ出かけてわざわざ学ばなくてはならなかった高等教育機関を、オリッサ地方に設置するよう強く要求したのである*4。

ラヴェンショウはオリヤ語を擁護、推進したことによって、現在に至るまで最も高い評価を受けた地方長官であり、「オリッサの友」とも称される*5。しかし、彼の強硬なオリヤ語の推進策はさまざまところで問題を引き起こし、イギリス官僚の間でも論争になった。オリヤ語論争の第一の局面はイギリス官僚間の論争からはじまり、その後オリヤ人を交えた形で展開することになった。だが、その前に彼の提言を通して、オリヤ語論争の問題点をあらかじめ整理しておきたい。

* 4 以上、T. E. Ravenshaw to Sect, Education Dept. to the Government of Bengal (以下 GB と略記)、(No. 369, 12 Sep. 1865), *Proceedings of Education Department in Bengal* (以下 PEDB と略記)、Jan. 1866, Nos. 13 & 14, P/432/7, Oriental and India Office Collections, The British Library, London (以下 OIOC と略記)。

* 5 ラヴェンショウはオリッサ地方長官に着任する以前に、パトナ県の徴税官だった。彼が着任早々、オリヤ語の一元化に強くこだわった理由には、彼の前歴にヒントが隠されていると考えられる。先行研究では彼のオリッサ地方長官時代だけが注目されてきたが、今後彼の前歴を含めて見直される必要がある。

2. 標準語化以前のオリヤ語とその ベンガル語との類似性

ラヴェンショウの提言の背景には、オリヤ語が出版語並びに近代語として十分に確立しておらず、標準化以前の雑多な言語であるという事情があった。キリスト教の伝道団によるオリヤ語の出版・印刷はすでに19世紀初頭から始まっていたが、1860年代に至るまでの出版史を振り返れば、その出版点数は微々たるものであったことは否めない*⁶。大学の創設、教育局の設置と補助金制度の導入、地方語 (Vernacular) 教育の推進を示唆した1854年のウッズの通達 (Wood's Despatch) 以降、オリッサにおいても教育機関の整備・拡充が行われ、教科書の需要が格段に高まると、活版印刷が未発達なオリヤ語の教科書ではなく、ベンガル語の教科書が多数供給されることになった。

このようにオリヤ語が軽視され、ベンガル語出版が台頭する原因には、両言語が類似していたことも大きく関係していた。少なくともこの当時の生徒たちにとってベン

ガル語の教科書でも不便はなかったのである。オリヤ語とベンガル語との類似性は早くから知られていた。スターリング (A. Stirling, 1793-1830)*⁷ はオリッサ地方の地理、統計、歴史についてはじめて纏まりをもった論文を1825年に発表した。この地域の *Or* 或いは *Odra* 民族の言語、すなわちオリヤ語が、テルグ語とは類似性がなく、ベンガル語とよく似ているが、サンスクリット語の影響を色濃く残したものであると特徴付けている [Stirling 1825: 205-206]。

スターリング以後、オリッサ地方の言語状況を最もよく理解していたのは宣教師たちだった。オリヤ語の教科書を用意したサットン牧師 (A. Sutton, 1801-54) *⁸ は、最もオリヤ語に類似する言語がベンガル語であり、10の単語のうち9が両方の言語で使用されているので、ベンガル語を使用する生徒は容易にオリヤ語を習得できると示唆している。彼は両言語が有する言語構造は同じなのだが、明らかに異なるのが発音であるとし、こうした類似と違いを説明するのに英語とフランス語の違いを例にあげている [Sutton 1831: vi-vii]。その後オ

* 6 キリスト教伝道団によるオリヤ語出版の歴史は、1809年にカルカッタ郊外の町、デンマーク領スリラムプル (セランポール) 教会ではじまった。新約聖書のベンガル語版からの翻訳・出版を手始めに、その後旧約聖書や讚美歌集、布教のための小冊子が数々出版された。1822年にカタックに、バプティスト会の宣教師ウィリアム・バンプトン (William Bampton) とジェームズ・ペッグス (James Pags) によってオリッサ・バプティスト伝道団が設立されると、38年には迅速な出版のために印刷所が併設された [Pags 1846: 16]。その後、政府の要請と伝道団による学校経営の必要からキリスト教の布教のための出版に留まらず、文法書・辞書・雑誌・教科書の出版へとその活動範囲は広がった。1865年まで、オリヤ語の教科書はこの「カタック伝道出版」とカルカッタにあったベンガル教科書協会において用意された。なお、キリスト教宣教師の出版活動の詳細については Shaw [1977], Dash, M. P. [1984], Dhall [1997] を見よ。

* 7 その他に、彼は豊富なペルシャ語の知識をもとに、はじめてオリッサ地方における土地制度史を明らかにした [Stirling 1822]。彼の報告は、歴史的側面に関し、その後の土地査定報告書にも用いられた [Maddox 1920]。

* 8 サットン是最初のオリヤ語の文法書 [Sutton 1831]、最初の体系的な辞書 [Sutton 1841-43]、および数々の教科書を編んだことで知られる。1860年代まで版を重ねたサットンの教科書としては、読本として使用された寓話集や歴史書 [Sutton 1866] などが挙げられる。

リヤ語がベンガル語に類似しているという
見解を強める一方で、彼はオリヤ語の正書
法の確立が急務であることをみずから編纂
した辞書の中で主張している [Sutton
Vol. 1 1841: 1-2]。

また、ベンガル管区における活版印刷の
状況を報告したロング牧師 (J. Long, 1814
-1887) は、オリヤ語はサンスクリット語
起源の言語であり、ベンガル語と非常に類
似しているが、独自の文学作品も印刷本も
使用人口も少ない言語であるとした
[Long 1859a: LXIII]。彼は別のところで、
オリヤ語が全く洗練されていない、遅れた
言語であるとも指摘している [Long
1859b: 189-190]。

このように「遅れた」「ベンガル語と類
似した」オリヤ語がかるうじて独自性や独
立性を確保していたのは、他の言語とは異
なる書体の伝統を持っていたことと、古く
からオリッサが一つの行政単位を構成して
いたことによる。オリヤ語はパーム・リー
フに鉄筆で書き込みやすくするために、ベ

ンガル語やヒンディー語などの北インドの
言語で使用される水平線 (シローレーカ
ー) を南インド風に丸めて表すという特徴
があり (図2)、キリスト教出版もこれに
応じたフォントを作成していた。

また、ラヴェンショウが例示するように、
オリヤ語の領域がオリッサ地方だけでなく、
北はベンガル管区のメディニプルから、南
はマドラス管区のガンジャム、西は中央州
のサンバルプルに及ぶという見解は早くか
らあった。このような認識はオリッサの歴
史的領域性についての認識と関連したも
のであり、多分に一地域には一言語が話され、
書かれているというイギリス統治者側の思
い込みによるものであったように思われる。
19世紀初頭、サンスクリット研究で有名な
コールブルック (H. T. Colebrook, 1768-
1837) は、ムガル時代のアクバルの治世時
代直後に置かれた「オリッサ州 (スーバ)」
の行政区 (図3 A) とオリヤ語領域を重ね
合わせた [Colebrook 1808: 225]*⁹。ス
ターリングはこのオリヤ語領域から現地調

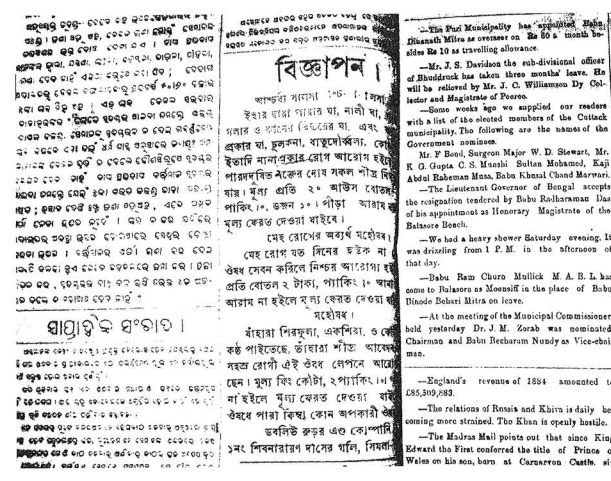


図2 オリヤ語とベンガル語の
書体。左側の欄がオリヤ語、中
央の欄がベンガル語で書かれて
いる (1884年のバレスヴォールの
『ウトカルの鏡』紙から)

* 9 ただし、オリッサ州の形式上の行政領域がどこまであり、実際の政治支配が及んだ領域がどこまでであったのかという議論はその後なされたことは指摘しておかなければならない。例えば Hunter [1872], Beames [1896] など。

ORISSA POLITICAL 1595

12 A

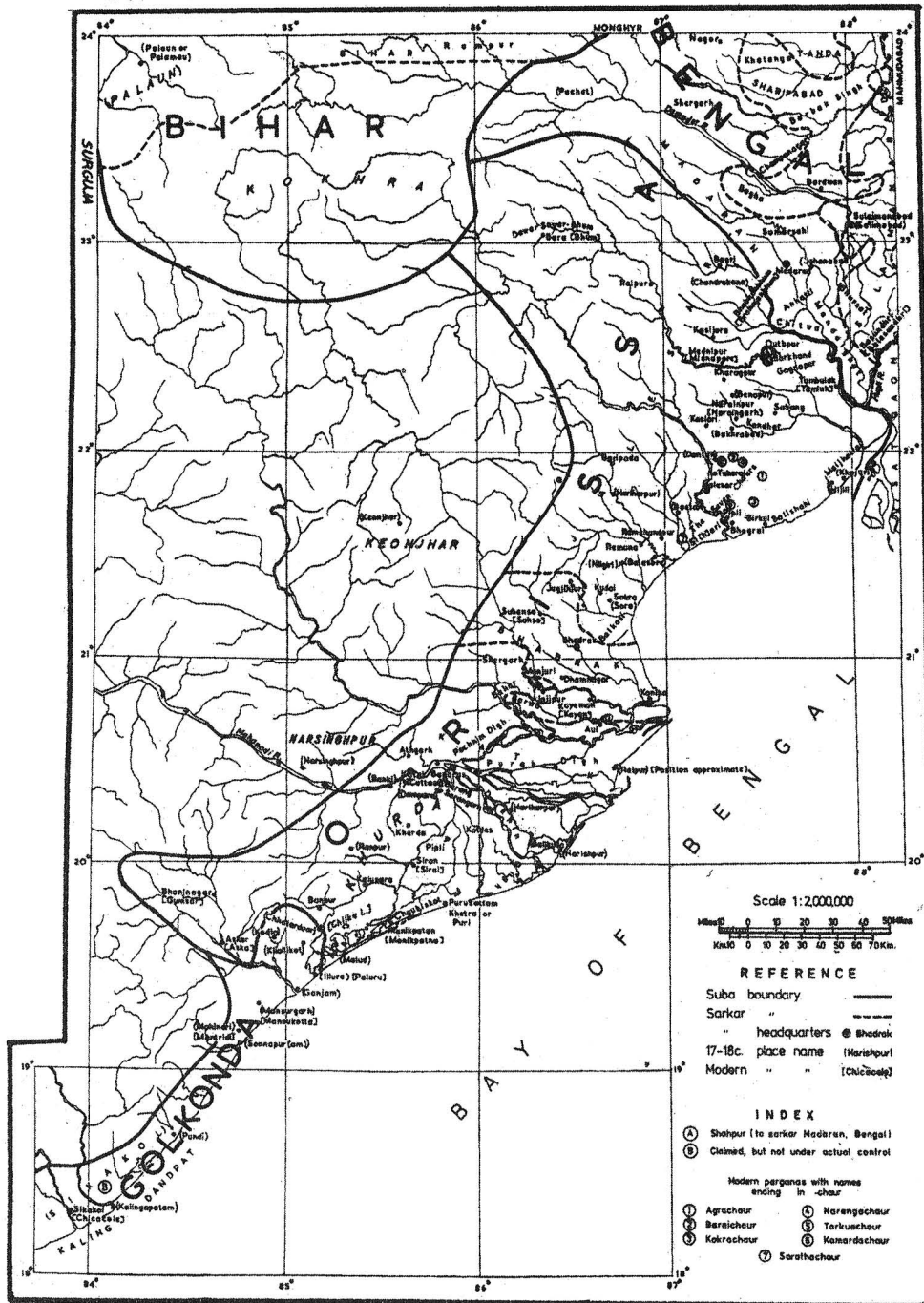


図3 A アクバル時代のオリッサ州の政治領域 出典: Habib [1982]
 ただし、この図は主に Hunter [1872] に基づいて、実際の統治の及んだ地域をオリッサ州の境界として
 囲んでいる。そのため西部の丘陵地域と南部のゴルコンダの領域はオリッサ州の行政区画外にある。

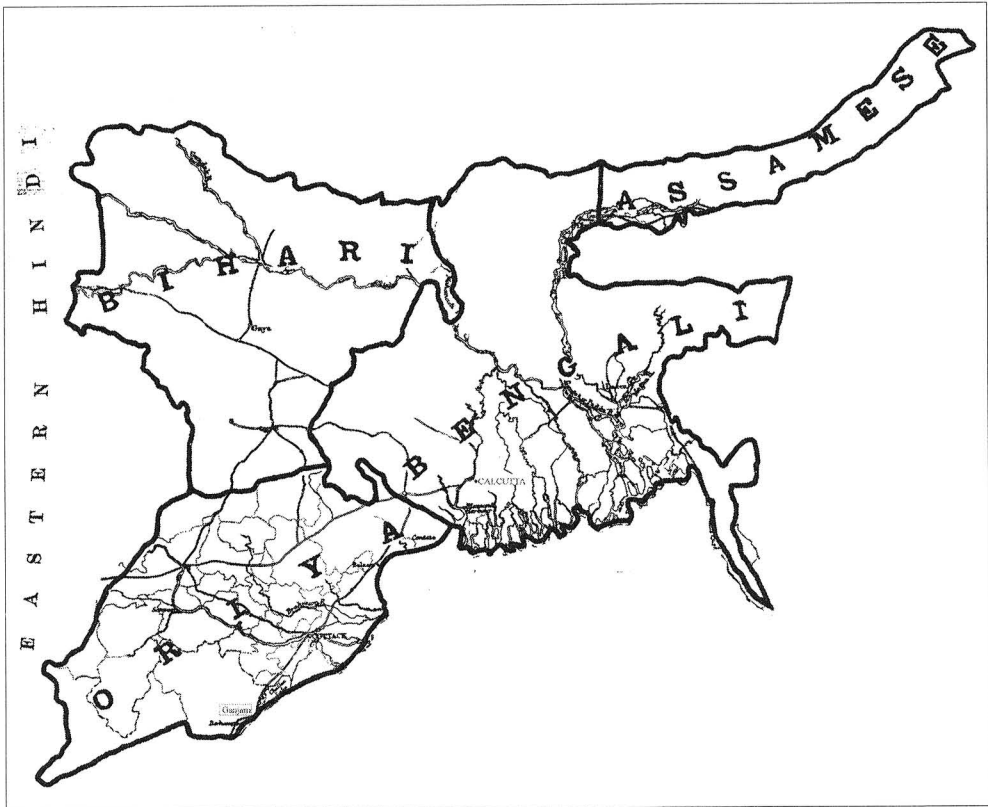


図3 B グリアーソンの言語領域の区分 出典：Grierson, G. A. (ed.) [1903]

査に基づいて不適切な地域を消去しているが、基本的にはこの観点を引き継いでいた [Stirling 1825: 206]。ラヴェンショウの認識はコールブルックとスターリングの系譜に連なるものだった。このオリヤ語領域は1903年に明らかにされたグリアーソン (G. A. Grierson, 1851-1941) の言語調査においても引き継がれている [Grierson (ed.) 1903] (図3 B)。

3. オリッサ地方におけるベンガル人の優越

これまでの研究史においてはオリヤ語の劣勢の主要な原因として、1803年の英領編入以後、オリッサ地方にベンガル人が下級官吏、教師、地主などとして流入してきた

ことがたびたび強調されてきた。

ベンガル人の流入は19世紀はじめ、オリッサにおける植民地支配の初期からすでに始まっていた。早くにイギリス統治下に入ったベンガルから、近代的事務員としてベンガル人が流入したのである。つまり、伝統的なオリヤ人事務員が鉄筆でパーム・リーフに書き込むスタイルに固執し、ペンを用いた新しい書記技術を修得するのが遅く、「全般的な業務、特にイギリス式歳入の計算に無知であった……結果的に、最良の政府の雇用はすべてベンガル人事務員の手にあった。彼らは高給に引かれて……、ベンガルにある彼らの家を離れた」のである [Toynbee 1873: 66]。その後も、官職に繋がる高等教育機関がオリッサになかった

こと、オリヤ人のブラフマンが官立学校の教育に不熱心であり、彼らが極端に英語教育を嫌ったことが、官職の多くをベンガル人が得るという悪循環となっていた*10。

さらに、イギリス植民地支配の初期に地租を滞納して競売にかけられたオリッサの地所を、ベンガル人がカルカットの競売を通じて盛んに購入した [Mohanty 1982: 10]。彼らのほとんどは不在地主であったが、何人かはその地所に移住していた [Pattnaik 1980: 77-78]。ポキルモホン・セナポティ (Phakirmohan Senapati, 1843-1918) は自伝の中で、バレスヴォルにおける最も有力な地主はベンガル人であり、彼らは教育委員会や政府に対して大きな影響力を持っていたと回想している [Senapati 1985: 40]。

従って、ベンガルからの移民は政府の雇用や学校教育において地元のオリヤ人以上に力を有していたことになる。彼らは植民地統治者とオリヤ人との間に立つ中間的な支配者として勢力をふるっていた。オリッサにおけるイギリス植民地支配はもう一つの植民地をその内部に分節化させ、結果としてオリッサはイギリスとベンガルとの二重の支配下に置かれていたことになる。

しかし、注意を要するのはラヴェンショウの着任当時、ベンガル人／語の存在そのものがオリッサの後進性や従属性の原因であるとする見方は強くなく、上記の支配構

造が意識化され対抗意識を生み出すのはオリヤ語論争の過程を通じてからであった。それ以前の両者の関係は全く曖昧であった。この点は次に検討する「カタック出版社」の設立過程の中で明らかになる。

4. カタック出版社の設立と対ベンガル関係の曖昧さ

カタック出版社は、ラヴェンショウが着任した7月にビチトラノンド・ダース (Bicitrananda Das, 1828-1875)、ゴウリーソンコル・ラーイ (Gaurisankar Ray, 1838-1917)、ジョゴモホン・ラーイ (Jagamohan Ray) といったカタックの官吏を中心に設立された。

出版社の設立目的は、ハレクルスノ・ダース (Harekrusna Das) とジョゴモホン・ラーイ*11を代表名とする政府宛ての設立申請書からうかがえる。「英語とベンガル語からの [オリヤ語への] 翻訳と同時に、オリヤ語における現存する独自の作品を出版すること」*12、つまり教科書を用意し、オリヤ語古典文学を出版することが目的だった。

「カタック出版社」は資金集めに奔走したビチトラノンド・ダースと実務責任者 (Secretary) で編集者のゴウリーソンコル・ラーイに負うところが大きかった。ビチトラノンドは地方長官の執務室の記録官 (Sheristadar) で、この出版社設立のため

*10 E. T. Trevor, Commissioner of the Cuttack Division, to Sect., Education Dept. to the GB, (No. 180, 13 May 1861.) *PEDB*, Jun. 1862, No. 15, P/15/68, (OI OC).

*11 当時ハレクルスノは藩王国担当副長官 (the Superintendent of the Tributary Mahals) だった [Mukherjee 1964: 453-454]。

*12 Harekrusna Das and Jagamohan Ray to R. N. Shore, Commissioner of the Cuttack Division, (5 Aug. 1864), *Proceedings of General Department in Bengal* (以下 *PGDB* と略記), Oct. 1864, No. 2. P/15/28 (OI OC).

に近隣の藩王たちや地主たちから資金集めをした [Roth 1925: 23]。ゴウリーソンのコルはピチトラノンドと同じ地方長官の事務所にあった為替局の事務員だった。

設立メンバーの構成員の特徴はベンガル出身者が多く関わっていたことである。ゴウリーソンのコルは祖父の代にベンガルからオリッサに移住してきた、いわゆるベンガル系三世だった*13。カタックにベンガルのブラフモ・サマージの支部を設立したジョゴモホン・ラーイは、ベンガル出身の副徴税官だった [Mishra, B. B. 1998: 143-144]。さらに、このベンガルとの深い繋がりには、カタック出版社の理事会の役員名簿にベンガル人名が含まれていたことからもうかがえる*14。出版社の設立はベンガル語に対抗することを目的としていたのではなかった。オリヤ人／ベンガル人の対立はこの時点においても明らかではない。

オリヤ・アイデンティティの初期形成において両者の対抗関係の顕在化が極めて重要な要素だったが、オリヤ語の近代化に関わった肝心のオリヤ人はベンガル人／語との密接な関係の中にあつた。両者の対立点が明らかになるのは、次に述べる大飢饉をはさんだオリヤ語論争の第一段階の過程においてであった。

II. オリヤ語の地位の否定とオリヤ・アイデンティティの関係 —— オリヤ語論争の第一局面：イギリス官僚とオリヤ人識字層

1. 大飢饉と変化

1866年にはじまる大飢饉はノ・オンコ (*Na-Anka*) とも称され、オリッサ地方の全人口の3分の1にあたるおよそ100万人近くの死者を出したとされる。前年の雨季における干ばつとこの年の洪水が直接の原因であったが、その後さまざまな要因が複合して飢饉の被害を大きくした。初期の大きな原因は、植民地当局が主要作物である米の干ばつによる被害を見誤り、不足する米の予測と補給に失敗し、翌年の異常な高騰をもたらしたことによる。さらに、ザミンダールの一部が貯蔵米を市場に出さなかったこともこの異常な米の高騰に繋がった [Pattnaik, G. 1980]。

こうした中でカタック出版社では、カタックの町を中心に米の高騰を抑え適正価格で販売するために「米販売社 (Rice Selling Company)」を1866年4月に設立している。米を購入する資金を調達し、カタックの町にあった15店を適正価格米の販売所

*13 ゴウリーソンの祖先がオリッサにやって来たのは16世紀あるいは17世紀のムガル時代であるという説もある。ここでは最近とられている説を採用した [Pati 1994: 1]。

*14 上記4人の他にこの理事会には、ディーナナト・ソロカル (Dinanath Sarkar)、スダルソノ・ダース (Sudarsana Das)、チョウドリー・ログナト・ダース (Chaudhury Raghunath Das)、ラッキューミナラヨン・ラーイ・チョウドリー (Laxminarayan Ray Chaudhury)、ラダ・シャム・ナリンドロ (Radha Shyam Narindra)、ゴウリ・シャム・ジェナ (Gauri Shyam Jena)、ゴロコ・チョンドロ・ボース (Golaka Chandra Bose)、ボノマリ・シン (Banamali Singh) らがいた [Dash, M. P. 1984: 197]。彼らのうち、ベンガル出身者はソロカル、チョウドリー、ボースである。彼らは主に官吏や教師だった。

として指定した*15。さらに同年8月には週刊紙『ウトカル・ディーピカ (*Utkal Dipika*)』を創刊し*16、大飢饉に関連する記事を報じた [Pattnaik, S. 1961: 72-73]。

8月25日付の『ウトカル・ディーピカ』はカタックに飢饉救済委員会が設置されたことを伝えているが*17、この年の雨季の雨量は洪水をもたらすほどの勢いで、迅速な救済活動を困難にした。この救済措置の対応のまずさが二次的な被害をさらに拡大させるに至った。

大飢饉の経験がこの地域の識字層の社会認識を変えた大事件であったことは多くの先行研究が指摘しているところである。飢饉を通して、特に出版に関わっていた識字層を中心に社会改革の意識が強まったことは否定できない。当初、飢饉の被災者たちの救済活動に始まった彼らの活動は社会改革への動きに接合され、各種の集会や団体を生むこととなったと考えられる。

飢饉の影響の残る1867年5月に、ウトカル (=オリヤ) 語進歩協会 (*Utkal Bhasa Uddipani Sabha*) が設立された。設立集会にはカタック出版社のメンバーを中心に14名が参加し、ロンゴラル・バナジー

(Rangalal Banerjee, 1827-1887) が議長を務めた*18。彼は著名なベンガル出身の詩人であり、カタックの教育局に勤め、飢饉救済委員会の委員でもあった*19。また、後に1873年にバレスヴォルで創刊されたオリヤ語新聞『ウトカルの鏡 (*Utkal Darpan*)』の編集者となった人物でもある [Sen (ed.) 1972: 123-124]。

設立集会では協会の名称が示す通り、オリヤ語の進歩をいかに図るかが話し合われた。さらに、裁判所の書記が使用するオリヤ語は「不純なオリヤ語」であり、これを「純粋なオリヤ語」に改めるべきであると主張した*20。そのため、「純粋なオリヤ語」が書ける人物を事務員として採用することを要求したのである。この「純粋なオリヤ語」の要請から、彼らが迅速なオリヤ語の標準化を目指していたことがわかる。オリヤ語の進歩とは誰にでも読める標準形の獲得のことであった。

その後、この協会は将来出版すべきオリヤ語の本のリストを、著作名、著者名、著者の経歴を付けて用意し、そのための部会を設立する方針を公にした。また、大学入学試験で採用するのにふさわしい読本を準

*15 Proceedings of Certain Native Gentlemen and other who associated them selves together in the Town of Cuttack, on 1 Apr. 1866, *Who's Who Compilation Committee Records*, Acc. No. 72, 57-62 (Orissa State Archives).

*16 創刊当初の発行部数は管見の限り明らかではない。参考までに1882年の発行部数を紹介すれば、200部であった。従ってこれを超える部数ではなかったことは確かであり、この数がどれほどの影響力があったのかは疑問に残る。Report on Native Papers in Bengal (for the week ending the 28th Jan. 1882) を参照。

*17 委員会にはデンカナルの藩王ボギロティ・モヒンドラ (Bhagirath Mahindra) やロンゴラル・バナジー、イーサン・チョンドロ・バナジー (Ishan Chandra Banerjee) らがおり、他にカタック出版社の理事でもあったディーナト・ソコカルやラッキューミナーラヨン・ラーイ・チョウドリーらがいた。Utkal Dipika, 25 Apr. 1866 [Pattnaik, S. 1978: 19-21].

*18 Ibid, 26 May 1867 [Mohanty, B. 1989: 213].

*19 Ibid, 25 Apr. 1866 [Pattnaik, S. 1978: 19-21].

*20 Ibid, 26 May 1867 [Mohanty, B. 1989: 211-212].

備するために、担当者が割り当てられた。この時、出版が予定されたのは *Rasa Kallola*, *Baidehisha Bilasa*, *Subhadra Parinaya*, *Bhasa Bhagabata*, *Mahabharata* といった韻文詩の古典作品だった*21。

カタック出版社は1867年8月から、それまでの手書きのリトグラフを使用する印刷方法を改め、鉛製タイプを利用する印刷機を導入し、これによって印刷量の増大を可能にする体制を整えた [Pattnaik S. 1961: 71]。

また、ベンガルに隣接するバレスヴォールにおいて、1866年11月にウトカル言語発達協会 (*Utkal Bhasa Unnati Bidhayini Sabha*)*22が設立された [Mishra, S. 1977: 704]。この協会はポキルモホン・セナポティを中心とする教師や官吏で構成されていた。彼らは「英語とベンガル語からの翻訳と同時に、オリヤ語における現存する独自

の作品を出版することを目的」*23として1868年に「ウトカル出版」を設立している。これはカタック出版社に次ぐものであったが、出資者はバレスヴォールの教師や官吏に限られていた。

ポキルモホンは当時バレスヴォールのミッション学校で教師を務めていた。彼は既にオリヤ語の教科書を2点ほど出版していた*24。彼は後にオリヤ語近代小説の父として知られる人物になる。その自伝の中で、ディーノクルスノ・ダースによる18世紀初頭の韻律詩 *Rasa Kallola**25の印刷をキリスト教系の出版社に断られたため、「ウトカル出版」を設立したと彼は説明している [Senapati 1985: 32-33]。1868年7月には月刊紙『ボドダイニー・オ・バレスボル・ソンバド・パヒカー (*Bodhadayini o Balesbar Sambad-Bahika*)]*26が刊行された [Pattnaik, S. 1962: 57]。

*21 *Ibid*, 10 Aug. 1867 [*Ibid*, 222-225]. *Rasa Kallola* はディーノクリスノ・ダース (Dinakrishna Das), *Baidehisha Bilasa* と *Subhadra Parinaya* はウペンドロ・ボンジョ (Upendra Bhanja), *Bhasa Bhagabata* もおそらくボンジョによる。これらはいずれも18世紀に生まれた韻文詩だった。*Mahabharata* は18世紀のクリスノ・シンホ (Krishna Simha, 1739-1788) によるオリヤ語版である。これは15世紀のサララ・ダース (Sarala Das) による同一作品と並んで親しまれていた。ただし、これらが迅速に出版された形跡はない。例えば、*Baidehisha Bilasa* はこの時の担当だったロンゴラル・バナジーではなく、ゴウリーソンコルの編集で1875年に出版された。*Subhadra Parinaya* も1875年の出版である [Mohapatra, P. 1986: 99]。なお、ボンジョの作品については *Premasudhanidhi* が1866年にすでに出版されている [Sharma 1986: 88]。

*22 会員として他にジョヨクリスノ・チョウドリー (Jayakrishna Chaudhuri, 教師), ボラナト・サモンタライ (Bholanath Samantaray), ゴビンド・プロサド・ダース (Gobinda Prasad Das, 官吏), ダモダロ・プロサド・ダース (Damodar Prasad Das, 作家), ラダナト・ラーイ (Radhanath Ray, 当時プリーの官立学校の教師, 後に視学官) らがいた [Senapati 1985: 32]。

*23 Phakirmohan Senapati and Company, Printers and Publishers of Balasore Utkal Press, to Magistrate and Collector of Balasore, (30 Sep. 1869.) *PGDB*, Jun. 1869, No. 57. P/432/5 (OIOC).

*24 読本で使用されたベンガルのヴィディヤーサーガルの伝記 [Senapati 1866a] とオリヤ語初等文法書 [Senapati 1866b] のことで、カルカッタのバプティスト伝道出版から出された。

*25 *Rasa Kallola* (歓喜の波) は当時最もオリッサで人気のある詩作で、クリシュナ神の生涯をうたったものである。後にバレスヴォールの徴税官、ビームズはセナポティの協力でこの作品を英文で紹介している [Beames 1872a: 215-216]。

*26 後に名称を『ソンバド・パヒカ (ニュース報道者)』と改め、1871年から週刊紙となった。本紙は19世紀後半の代表的なオリヤ語新聞であり、『ウトカル・ディーピカ』のよきライバル紙でもある [Roth 1920: 408]。ただ、管見の限り、週刊紙以前の紙面は残っていない。

2. オリヤ語論争の第一局面の争点 — オリヤ語は近代的水準以下 の遅れた言語か

以上のようにオリヤ語の出版活動が進展し、標準化が急がれ、古典文学発掘熱が高まりつつある中で、ラヴェンショウのオリヤ語推進論に強く反対するイギリス人官僚の意見が公開された。1868年1月4日の『ウトカル・ディーピカ』は、「オリヤ語学校のすべてでベンガル語の学習を強制的に行い、ベンガル語本がすべての学校の教科書として定められるべきである」と主張する、二人のイギリス人官僚の提案を強く批判している^{*27}。

批判の矛先となったのは、南西地区の視学官であったマーティン (R. L. Martin) と、彼の上司にあたるアトキンソン (W. S. Atkinson) である。オリヤ語論争の第一の局面では、イギリス人官僚内のオリヤ語擁護者ラヴェンショウとベンガル語推進者アトキンソン、さらに現状肯定派のマーティンの三者を中心に議論が展開された。

『ウトカル・ディーピカ』から非難されたマーティンは、オリッサの大飢饉が一段落した1867年8月に、ラヴェンショウの提言に対する見解を提出していた。しかし、『ウトカル・ディーピカ』の非難とは異なり、彼は強固にベンガル語を推進しようとしたわけではなかった。オリヤ語推進派の知識人の反発を買うであろう唯一の箇所は、

マーティンがベンガル語と比較して、オリヤ語を近代的な発展を遂げていない、非常に遅れた言語とみなしていた点である。彼は「ここ20年間にベンガル文学はかなり向上したので、現在の印刷本に使用される言語はほとんど新しいものである。一人のヴィディヤーサーガルとともに始めて、オリヤ語をベンガル語が今日ある状態にするなら、少なくとも20年を要するだろう」と指摘した。

マーティンはラヴェンショウの学校教育におけるベンガル語全廃の提言を、現状とかみ合わないものと考えていた。ラヴェンショウの提言に従うなら、必然的にベンガル人生徒にオリヤ語を強制的に習わせ、ベンガル語をおろそかにさせることとなる。マーティンは下級学校においてのみオリヤ語が教授されるべきであり、それより上級の学校ではベンガル語を選択科目とするという現実的な提案を打ち出した^{*28}。マーティンはこの見解を1868年3月の修正報告においても変えていない^{*29}。

実際にオリヤ語に最も否定的な態度をとったのはアトキンソンである。彼はオリヤ語が文学もない、地方の方言 (patois) に過ぎず、いまさら学校でわざわざ学習する必要のない言語だと考えていたようである。彼は「ベンガル語をオリッサのすべての中級、上級クラスの学校で必修科目とすべきである」と指摘した^{*30}。この意見がやや誇張された形で、オリヤ人識字層に受け止

*27 *Utkal Dipika*, 4 Jan. 1868 [Mohanty, B. 1989: 225].

*28 以上 R. L. Martin to Dir. of Public Instruction, Education Dept. to the GB (No. 632, 9 Aug. 1867) *PEDB*, Nov. 1867, No. 18, P/432/8 (OIOC).

*29 R. L. Martin to Dir. of Public Instruction, Education Dept. to the GB (No. 2625, 30 Mar. 1868) *PEDB*, Nov. 1869, No. 6, P/432/10 (OIOC).

められたのである。マーティンに関する限り、オリヤ人識字層の反応は明らかに過剰だった。もっとも、オリヤ語の後進性やベンガル語との類似性は、彼ら自身が実はよく自覚していたことだった。それ故に最も触れられなくなかった点であり、それをマーティンに指摘されたための過剰反応であったのかもしれない。ともあれ2人の提案はオリヤ人識字層にオリヤ語の地位をなし崩しにしてしまう危機感を与えるものであった。

また、ちょうどこの頃、ラヴェンショウはオリヤ語の一元化とベンガル語の全廃という自分の提言について、徴税官、学校長、地元の有識者たちに意見を求めている。アトキンソンとマーティンの反論は、実はこのラヴェンショウの意見要請書の中に同封されて、公にされたものであった。カタックの識字層はジョゴモホン・ラーイを代表に、請願書(1868年4月15日付)として彼らの意見をまとめ、ラヴェンショウ宛てに提出した。それは、オリヤ語がベンガル語の方言ではないこと、独自の文学を有することを古典文学のリストを付けて強調するものだった^{*31}。ここに至って、オリヤ語の古典文学の存在は、文学なき言語という見解を崩すための、オリヤ語の地位を保証する重要な証拠として取り上げられることになった。さらに、オリヤ人識字層はベン

ガル語の存在をオリヤ語の地位を脅かすものとして捉え、オリヤ語の独自性を際立たせることに腐心するようになった。このような危機感は、ベンガル語への対抗意識を強化し、それまで漠然としたアイデンティティに具体的な輪郭を与えたと思われる。

3. イギリス人官僚のオリッサ——オリッサの後進性とオリヤ語の危機をもたらす要因としてのベンガル

教場におけるベンガル語の全廃とオリヤ語への一元化に関し、アトキンソンとマーティンに反論されたラヴェンショウは、自分の主張を揺るがされるどころか、ますます自信を深めていた。彼はマーティンの1867年8月の修正報告と徴税官、学校長、地元の有識者たちの意見を勘案した修正案をまとめ、自らの見解を強化している。我々はここでラヴェンショウが彼の主張を曲げなかったことを確認するにとどめ、マーティンの修正報告を含めたイギリス人官僚の注目すべき見解について検討してみたい。

マーティン報告の注目すべき点は、オリヤ語がマドラス管区や中央州においても話されていることを挙げ、それが公正に取り扱われてこなかった理由として、オリヤ語地域が複数の行政区に統治されているため

* 30 W. S. Atkinson to Secy., Education Dept. to the GB (No. 3591, 26th Aug. 1867), *PEDB*, Nov. 1867, No. 18, P/432/8 (OIOC). アトキンソンは以前からオリヤ語には否定的だった。彼は大学入学試験において、学生たちがオリヤ語を第2言語として選択したがらず、廃止すべきとする Medlicott の意見を支持した経緯があり、その当時からオリヤ語をベンガル語の方言と見なしていた。W. S. Atkinson, to S. C. Bailey, Jun. Secy., Education Dept. to the GB, *PEDB*, Jun. 1863, No. 143, P/15/70 (OIOC).

* 31 Jagamohan Ray & others, to Ravenshaw, (15 Apr. 1868), *PEDB*, Jul. 1868, No. 60. P/432/9 (OIOC).

だと指摘しているところである。また、マーティンはオリッサ地方は話者の多いベンガル語の領域と一体化しているために、視学官がオリヤ語の教育状況について細かな目配りをするができないという行政上の欠点を挙げている^{*32}。これは後にオリヤ人識字層によって共有される認識を先取りするものだった。

一方のラヴェンショウは、イギリス人官僚がオリヤ語以上にベンガル語を重要視する理由を、副視学官がベンガル人であり、その上司のイギリス人視学官が彼らに影響されるからだと説明した。さらにオリヤ人が公正な取り扱いを受けてこなかったのは、非常に大勢のベンガル人がオリッサで官吏として採用されており、ベンガル人が「多くの土着のオリヤ人たちに落とされるはずであったその地域の最も条件の良い、最も給料の高い職を横領し」たことによると説明した^{*33}。彼はオリッサにおける後進性を、ベンガルとの関係において理解する立場を先取りしてみせたのである^{*34}。

III. オリヤ人とベンガル人の対立化——オリヤ語論争の第二局面

1. ラジェンドロラル・ミットロによるオリヤ語のベンガル語への同化案

このような教育言語の一元化の問題がイギリス人官僚の間で戦わされていた中で、カタックの識字層の間にも議論が及ばないわけはなかった。しかし、オリヤ語を擁護する動きがあるのに対し、ベンガル語を擁護する動きは流入ベンガル人の間から出てこなかった。彼らはこの議論に加わるには微妙な立場にあったと考えられる。

従って、最初に議論の口火を切ったのは、オリッサ地方の外からやってきた人物だった。ベンガル人学者のラジェンドロラル・ミットロ (Rajendralal Mitra, 1824-1894) がその人だった。すでに著名な歴史家として知られていた彼は、1868年の冬に調査のためにオリッサ地方を訪れたのである。

ミットロの目的は、オリッサ地方に残された古代の遺物(刻文、彫刻、石窟、寺院など)を調査し^{*35}、正確な測量と描写と

*32 以上, R. L. Martin to the Dir. of Public Instruction, Education Dept. to the GB (No. 2625, 30 Mar. 1868.) *PEDB*, Nov. 1869, No. 6, P/432/10 (OIOC).

*33 このことからイギリス官僚を含むオリヤ語派対ベンガル語派の論争という派閥争いの観点で、この問題を理解できなくもない。ラヴェンショウは先のオリヤ語活版印刷を立ち上げた人々、特にゴウリーソンコルとビチトラノンドと密接な関わりを持っており、彼の意見や助言を反映したものであったことは否定しようのない事実である。しかし、筆者はこうした捉え方を前面に押し出すことは、問題を不当に単純化しすぎることになると考える。

*34 T. E. Ravenshaw to Sect. Education Dept. to the GB (No. 99, 4 May 1868), *PEDB*, Jul. 1868, No. 59. P/432/9 (OIOC).

*35 調査期間は1868年11月4日から12月14日であった。この間彼はカタック、ブヴァネシュワル、カンダギリ、ダウリ、ソットヨパディ、コナーラクを訪れた。Rajendralal Mitra to Sect., General Dept. to the GB., (2 Feb. 1869), *PGDB*, Feb. 1869, No. 74, P/432/5 (OIOC).

写真によってこれらを記録・収集することだった*³⁶。12月の初旬に彼はこの調査の途中で、カタックに滞在した [Pattnaik, S. 1962: 56-57]。その際に彼はこの年の2月に設立されたカタック弁論クラブ (Cuttack Debating Club) の集会*³⁷に招待された。この席で彼は、カルカッタ高等裁判所の事務弁護士 (Advocate of the Calcutta High Court) ゴーシュ (K. C. Ghosh) が行った、愛国心 (Patriotism) についての英語発表に対し意見を求められた [Mukherjee, P. 1964: 428]。

彼の回想に従えば、彼は「誤った愛国心、すなわち民族的なもの (national) のすべてに対するばかげた愛が、現実の進歩にもたらす弊害について批判」し、これを「地域の方言——彼らが別個の言語に昇格させようと願っている——への愛着によってオリヤ民族に加えられてきた弊害」と重ね合わせたのである [Mitra, R. 1870: 201]。さらに彼は、オリッサが発展するためにはオリヤ語を捨て、ベンガル語を導入すべきであると主張した。その根拠として、オリヤ語が別個の言語とするには十分な話者人口を持たず、しかも双方がかなり類似した

言語であり、ベンガル語出版の圧倒的な供給量を考えればオリヤ語にこだわることは益がないと指摘した。「最近3ヵ月の間に300冊がベンガル語で出版された。オリヤ語では3ないし4冊以上出ていないのに対してである」と彼は断言したのである*³⁸。

彼は後にこの時の聴衆の反応が温厚なもので、彼らが自分の提示した新しい視点に共感していたと回想している [Mitra, R. 1870: 201]。しかし、オリッサの発展のためにベンガル語を採用し、実際それが不可能ではないことを力説する彼の意見は、上述したように全く新しい見解ではなかった。すでにオリヤ語の地位をめぐるイギリス人官僚たちの論議がこの地方で物議を醸していたことを考えれば、聴衆の反応はかなり複雑であったと考えられる。

2. ベンガル人によるオリヤ語のベンガル語への同化の主張とオリヤ人識字層の反論

ミットロの意見に対する聴衆の複雑な感情は、当時のカタックにいた識字層の構造と関係があった。先に述べたカタック出版社やオリヤ語進歩協会にしてもベンガル人

* 36 成果は後に写真と挿絵をふんだんに使用した豪華な2巻の大判本として刊行された [Mitra 1875 & 1880]。ミットロはガードナー・ウィルキンソンによる古代エジプトの研究 [Wilkinson 1837] をモデルにし、平面図、測量、製図あるいは特に彼がこだわった写真、さらには刻文分析を加え、これらを整理・比較・分析した。このような当時の史学における先端的な作業とともに歴史を描き出そうとする彼の試みは、オリッサをフィールドとした実験作でもあったと考えられる。その意味では彼以前にオリッサで遺跡調査を行ったキトー (M. Kittoe) の旅行記風の記述とは異なっていた [Kittoe 1837]。なおミットロの調査はインド政庁から援助を受け、旅行費用は932ルピーで、他に写真の現像代として606ルピーが支払われた。T. J. Chichele Plowden, Offg. Under-Sec. General Dept. to the GB. to Secy. to the Govt. of India in the Home Dept. (No. 1499, 7 May 1872), *PGDB*, May 1872, No. 2, P/157 (OIOC)。

* 37 このクラブは英語力の向上のために設けられたもので、発表も議論も英語で行われた [Pattnaik, S. 1962: 50-51]。O. C. チャタジーが実務責任者で、その後の発表者から分析するとベンガル人が多かった。おそらく参加者は集会所の規模から考えて、多くて30名ほどだった。毎回の演題は『ウトカル・ディーピカ』紙に広告として掲載された。

* 38 *Utkal Dipika*, 13 Mar. 1869 [Mohanty, B. 1989: 243-245]。

とオリヤ人が交じり合っていた。カタック弁論クラブは実務責任者がベンガル人であり、発表者の多くもベンガル人だったが、カタック出版社のオリヤ人も参加していた。出版や協会やクラブに参加していた双方の識字層のほとんどは官吏と教師だった。彼らは植民地政府関連の事務所や学校や各種委員会において交流があり、職場仲間であることが多かった。この場合、オリヤ人官吏はベンガル人が上司である場合がほとんどだった。

そのためか、『ウトカル・ディーピカ』がミットロの主張に反論するにはそれから4ヵ月も要した。同紙は彼の意見の多くが事実の取り違えによるものであるとし、激しく非難した。例えば彼はオリヤ語の話者は取るに足りないとしているが、それは飢饉委員会において査定されたオリッサ地方のみを対象としているためである。実際は、それ以外の北はメディニプルから南はマドラス管区のガンジャム、西は中央州のサンバルプルまでを含む広大な領域でオリヤ語が話されていると反論した。そして、複数の行政区にオリヤ語領域が分かれているあり方自体が、オリヤ語の発展を阻む障害として立ちはだかっているのだと主張したのである*39。

特に『ウトカル・ディーピカ』はミットロの調査に絶大な期待を寄せていたため、その落胆ぶりには激しいものがあった。同

紙はミットロの来訪以前に彼の調査に全面的に協力するよう読者に訴えていた。というのも、第一に彼の調査によってオリッサの輝かしい歴史と古代オリヤ人の業績が国内外で認められると期待し*40、第二にこのことを通して、徐々にオリッサが現在の衰退している状況から復活するであろうという、将来の進歩への自信を与えてくれる調査だと捉えていたためである [Mohapatra, P 1997: 83]。

このミットロの発言に端を発し、オリヤ人とオリヤ語を否定的に見る特定のベンガル人との間に言語をめぐる論争が行われることになった。オリヤ語をベンガル語へ同化することを主張するベンガル人のほとんどは教師、視学官、教育委員といった教育関係者であり、それに反対するオリヤ人の方はカタック出版社のメンバーを中心とする官吏や教師だった。このグループにはロンゴラル・バナジーなどのベンガル人も何人が加わっており、単純にオリヤ人対ベンガル人という構図ではなく、両者は入り組んだ関係を形成していた。

その後、副視学官のウマチャロン・ハルダル (Umacharan Haldar) が創刊間もない英字新聞『カタック・スター (Cuttack Star)』(1869年2月創刊)*41への長文の投書の中で、オリヤ語をベンガル語の書体で書くべきであることを提案した。彼はこの根拠に双方の類似性ばかりか、ベンガル語

* 39 ただし、後に見られるような、これらの領域を統合する案はこの時出されていない。以上 *Ibid* 及び [Boulton 1993: 72-73] を参照。

* 40 ミットロはオリッサに残る寺院や遺跡の重要性を認めていたが、それらが「オリッサのもの」とは考えていなかった。彼が調査したのはあくまでも、インドあるいはヒンドゥーの寺院であり、「古代」の遺物としてであった。つまり、現在のその土地の人々に連なるものとしてそれらを認識していたのではなかった。

* 41 この新聞に関する詳細な情報は得られなかった。

の書体が美しいことを挙げた。当然のことながら『ウトカル・ディーピカ』は猛然とこれに抗議した。「オリヤ語の書体は丸みをおび、ベンガル語の書体は半円か三角である。ベンガル語は彼にとって大きな真珠のネックレスに掛かる、ダイヤモンドを散りばめたメダルのように見えるようになったか、あるいはその三角の形が突然彼にリーダーかクルスノ [クリシュナ] を思い出させるようになったのかどちらかに違いない。それゆえ、ヴィシュヌ信仰に翻弄されて、その愛で彼は満たされているのである」とかなりきつい調子で皮肉り、彼の書体の美学に基づく意見を一蹴した*42。

しかし、このハルダルの発言を支持する動きがあった。カタック弁論クラブにおいてはオリヤ語をベンガル語の書体を使って書くことが承認された。また、ベンガル出身の地主カリポド・バナジー (Kalipada Banerjee) によって創刊 (1869年2月) されたオリヤ語新聞『ウトカル・ヒトイシニー (Utkal Hitaisini, ウトカルの奉仕者)』もまたこの提案を支持した*43。カリポドはカタック公教育運営委員会 (Cuttack Public Educational Working Committee) のメンバーだった。一方、この委員会には『ウトカル・ディーピカ』やカタック出版社に関わりのあったディーナト・ソロカルやピチトラノンド・ダースがいた*44。オリヤ語を擁護するグループはカタック出版社を中心に反対集会を開

き、「オリヤ語をベンガル語の書体を使って書くことは有害である」と決議した*45。ここに至って両者の対抗関係が言語をめぐる明らかになった。

こうした論戦の続く中で、1869年の11月には教育言語に関する暫定的な原則がオリッサの学校において施行された。「オリッサ地方にあるすべての学校 (2つしかない官立県 (Zilla) 学校をも含む) において、オリヤ語が教育の媒体であるべきこと、また官立県学校とカタックの高等学校において、すべての生徒がもし望むのであればオリヤ語で勉強を続けられ、オリヤ語を選択科目とすべきだ、という原則を (ベンガル) 準知事は容認する」という原則が通達された*46。つまり、ラヴェンシヨウの路線ではなく、マーティンの路線に近い原則を採用したといえる。ただし、ベンガル語の取り扱いについては全く漠然とされたままであり、言及されなかった。とはいっても、オリヤ語を重視する姿勢が明文化されたことだけは確かである。

当然のことながら、こうした原則が出されたところで、事態が收拾に向かうはずはなかった。かえってベンガル語を擁護する動きを刺激することになったのである。1870年のはじめにバレスヴォル県の官立県学校の教諭、カンティチョンドロ・ボッタチャルジョ (Kantichandra Bhattacharya) はベンガル語の小冊子、『オリヤ語は独立した言語ではない (Uriya Swatantra

* 42 *Utkal Dipika*, 10 Jul. 1869 [Mohanty, B. 1989: 243-245].

* 43 その意味でこの新聞名は皮肉である。なお管見の限り、同紙は現存していない。

* 44 *Utkal Dipika*, 3 Apr. 1869.

* 45 *Ibid.*, 10 Jul. 1869 [Mohanty, B. 1989: 243-245].

* 46 Rivers Thompson, Sect., Education Dept. to the GB to Dir. of Public Instruction, (No. 3686, 8 Nov. 1869), *PEDB*, Nov. 1869, No. 7, P/432/11 (OIOC).

Bhasha Nahe』を出版し、これは直ちに大きな波紋を生んだ*47。彼はオリヤ語がいかに独立した言語ではないかを、ベンガル語との類似性を根拠に文法的に、言語学的に実証しようと試みたのである。「しかしながら、比較言語学に関する学術的な著作として、カンティチョンドロ・ポッタチャルジョの小冊子は重要ではない。その重要性は全く政治的なものである」*48というあたりが妥当な理解であろう。

また、カンティチョンドロの小冊子はオリヤ人識字層だけでなく、イギリス人官吏によっても反論された。バレスヴォル県の徴税官、ビームズはこの小冊子を言語学の素養を駆使して論破しようと試みている。オリヤ語がいかに独立した言語であるのかを証明しようとし、ビームズはミットロとも論争した [Beames 1870: 192-201]*49。

さらに、同じくバレスヴォル県では副視学官シボダーシュ・ポッタチャルジョ (Sibadas Bhattacharya) が、この県の地方語学校でオリヤ語をベンガル語に替えるべきであると発言し、現地の人々がこれに反発して、徴税官のビームズにこのベンガル人役人の退官を求めていることが報じられた*50。流入ベンガル人がことに多かったこの地域においては、事態は双方にとって深刻であった。ポキルモホンはこの発言に反対して署名運動を展開した。これ以後も1870年代と80年代を通して、ベンガル語を教育言語として再導入する動きは止むこ

となく、オリヤ語をベンガル語に同化しようとする意見がしばしばバレスヴォルを舞台に物議を醸すことになった。

IV. オリヤ語論争を通じたアイデンティティ形成とは何か——ゴウリーソンコルとポキルモホンを手掛かりに

1. 未解明の問題：オリヤ・アイデンティティ

以上論じてきたことは、いわばオリヤ語論争の要因と展開についてであり、本題のオリヤ・アイデンティティの初期形成について十分に議論されたわけではない。しかも、これまでの説明では、オリヤ・アイデンティティを強く抱いた人物たちが両義的であったことが十分に説明されたとは言えず、彼らがオリッサとベンガルのいずれも選び取れる選択的な位置にあったことが十分に強調されてこなかった。そこで、先に触れたオリヤ語活版印刷の創設において重要視されたゴウリーソンコルとポキルモホンを取り上げ、選択的な位置にあった彼らがいかにオリヤ・アイデンティティを形成しえたのかについて検討したい。

オリヤ語ジャーナリズム史において最も重要視されてきたゴウリーソンコルは、1838年に官吏を家業とするバラモンの家系に生まれた。父は事務官 (Moharir) として裁判所に勤めていた。彼は初等教育を伝

*47 *Utkal Dipika*, 26 Feb. 1870 [Mohanty, B. 1989: 251-252]。また、この論争については Mohapatra, P. [1997], Samal and Nayak [1996], Pati [1994] も参照した。

*48 *Calcutta Review*, Vol. II, No. CI, 1870, xii-xiii.

*49 彼はオリヤ語の古典文学の紹介にも努めていた [Beames 1872: 79-80].

*50 *Utkal Dipika*, 26 Mar. 1870 [Mohanty, B. 1989: 253].

統的な村落学校チャトサリー (Catasali) で受け、ここでオリヤ語の初歩を習った。次にペルシャ語をこれも村落学校であったモクトブ (Maktab) で学習し、その後11歳の時にディーキットパラ (Dikshitpara) 村^{*51}から出て、カタックにあった英語学校に入学した。ここでジュニア奨学金を得ている。1856年にはベンガルのフグリ・カレッジに入学した。18歳の時である。ゴウリーソンコルは当時の学制における典型的な官吏育成コースを歩んでいた。

しかし、彼はカルカッタの伯父の薦める結婚を父親から反対され、カレッジを中退し、2年余りのベンガル滞在でオリッサに帰ることを余儀なくされた。この間、彼はオリヤ語、ベンガル語、ペルシャ語、ウルドゥー語、サンスクリット語、英語を習得している。その後、バレスヴォル県の学校での臨時教師を経て、カタックの地方長官の事務所に転じ、為替局の事務員として働いた。

その後、1866年8月に創刊された週刊紙『ウトカル・ディーピカ』において、編集者として中心的な役割を担い、20世紀初頭までオリヤ語ジャーナリズム界の柱石として活躍した。ポールトンに従えば、「血によってゴウリーソンコル・ラーイはベンガル人であったが、言語と出生地によって彼はオリヤ人であった」[Boulton 1993: 73]。しかし、これでは彼が両義的で境界的な位置からオリヤ・アイデンティティを形成したことの十分な説明にはなっていない。

一方、ポキルモホンは1843年にベンガルともオリッサとも言いがたい境界地域のバレスヴォル県のカンダヤートの家に生まれた。幼少時代に両親と兄弟を病気で亡くし、彼自身も病弱な少年として育った。伯父と祖母に育てられる中で、初等教育を村落学校のパトサラ (Pathasala) で終え、その後バレスヴォルの町のペルシャ語学校へ進み、次にバロボティ (Barabati) 学校に入学した。彼は成績優秀であったが、貧困のために学費が払えずにここを中退している。それでも1864年にミッション学校に教師として雇われた。彼は独力で英語を習得し、他にサンスクリット語、ペルシャ語、ベンガル語、オリヤ語が使えた。学校での宣教師との関わりが縁で、彼はバレスヴォルの臨時徴税官のパッシー (R. H. Passi) や副治安判事のメイヤーズ (Mayers) などにベンガル語を教えていた。1869年5月にジョン・ビームズが徴税官として着任すると [Beames 1984: 190]、多言語に通じる能力が認められて、彼の執務室にオリヤ語を教えに通った [Senapati 1985: 25]。この徴税官時代にビームズは彼の比較言語学の大著を執筆している^{*52}。

後にオリヤ語近代小説の父として知られるようになるポキルモホンもまた、オリヤ人ともベンガル人とも枠付けられない両義性を有していた。それは彼の育った地バレスヴォルが境界地帯であったことに加えて、彼の使用した「オリヤ語」そのものに見出される。彼はベンガル語本をオリヤ語へと

*51 カタックから18マイル離れたところにあった。

*52 後に3巻本として出版された大著、*A Comparative Grammar of the Modern Aryan Languages of India: to Wit, Hindi, Panjabi, Sindhi, Gujarati, Marathi, Oriya and Bengal* のことである。オリヤ語は彼が習った最後の言語だった。

翻訳したが、それらはベンガル語化されたオリヤ語だと非難されるほどだった [Pattnaik, S. 1961: 70]。しかも、彼はベンガル語出版から多大な影響を受け、それへの憧憬を抱いていた。

活版印刷の設立当時、ゴウリーソンコルにせよポキルモホンにせよ、オリヤ語、あるいはオリヤ・アイデンティティとは決して自明なものではなく、選択すべき位置にあったと考えられる。また、このような彼らの微妙な位置は、前に述べた彼らが明確にベンガル人を対抗関係としてあらわさなかった曖昧な態度と関連していたように思われる。

2. オリヤ語論争を通じたオリヤ・アイデンティティの浮上——両義性とアイデンティティ

では、彼らの両義的、境界的な位置からどのようにオリヤ・アイデンティティが獲得されることになるのか？ この点については、これまでの事実を整理する中で総括したい。

オリヤ語活版印刷が開始された当初、オリヤ・アイデンティティは全く曖昧なものであったと考えられる。ゴウリーソンコルにせよ、ポキルモホンにせよ、ベンガル語との繋がりが強かった彼らにとって、この時点で強固にオリヤ語にアイデンティティの核心を求めるほどの必然性はなかった。教科書の出版と過去へ繋がる漠然とした記憶としての古典文学を活版印刷の中で復興するという彼らの目的は、当初オリヤ知識人と流入ベンガル人たちによって推進され、大らかな雰囲気を漂わせていた。

しかし、このような空気はたちまち一変

してしまった。社会改革への意識を強めた大飢饉と同時に、教育言語の一元化をめぐるイギリス人官僚内の議論において、オリヤ語は近代文学を持たない、出版文化を持たない遅れた言語として、しかもベンガル語との比較の中で否定的に取り扱われた。このような危機の中で、彼らはオリヤ語へのアイデンティティを強く意識し始めたのである。

さらに決定的だったのは、ミットロの意見をはじめとする、特定のベンガル人がオリヤ語の独自性を否定し、ベンガル語に同化する提案を打ち出すようになったことだった。教育言語の一元化の議論において、ベンガル語の優位な立場が揺るがされるとこのような態度は一層強まったのである。これと同時に、オリッサの発展を阻害するものとしてベンガル人が位置づけられ、それまで漠然とした関係にあったベンガル人が他者化されてしまった。それまで大きな影響を受けていたベンガル語を否定することによって、「オリヤなるもの」を掌握しようとしたのである。

ゴウリーソンコルやポキルモホンの両義性を考慮に入れるならば、オリヤ語論争を期に顕在化したアイデンティティとは、ベンガル語／人を私のものとしなない、わたしはオリヤ人なのであるというものである。つまり、自己らしくないものがベンガルに結びつけられ、自己の差異としてベンガルが抽出された。それによって自己らしくない自己の差異としてのベンガルが自己を映し出す鏡となり、オリヤ・アイデンティティが形成されたと言える。

しかしながら、最も強調されなければならないのは、この自己らしくないもの、つ

まりベンガルは実は排除しきれずに自己の内部に存在していたのである。つまり、初期オリヤ・アイデンティティ形成とはA対Bという対抗関係ではなく、A+B対Bの対抗関係によって成立した。ただ、実際の主張の現場では、A内でのAとBとの境界性は明らかにされず、抹消されており、A対Bの対抗の内に収斂したのである。

その意味で、オリヤ・アイデンティティとは他者との両義的、境界的な場に身を置く、他者を自らの内に置く人間によって提起されたと言える。ただし、彼らは表面上、ベンガルに対する剥き出しの対抗意識を表現することがなく、オリヤ語の否定といった事件において瞬間的に特定のベンガル人に対して敵対心を露わにするにとどまった。

また、オリヤ語論争の間に、オリヤ語の領域と行政領域が重ならない状況に、「遅れたオリッサ」の諸原因が求められ、想像の領域としてのオリヤ語領域が内化された。この発想は後のオリヤ語領域を統合する運動の土台となる観念だった。また、もう一つの見逃せない発想があった。それは後進的なオリッサが、過去の輝かしい時代と接合され、将来のオリッサが後進性を克服しうる根拠とされたのである。それはオリッサの統合によって果たされるという、いわば神話的な回帰思想として統合運動の中で脈々と受け継がれていくのであった。

むすび

最後に以上の観点を敷衍し、これからのオリヤ・アイデンティティ研究の見通しと課題について述べ、むすびとしたい。

これまで、オリヤ・アイデンティティの初期形成をベンガルとの関係性に着目しつつ、両者の境界に位置する特定の地域の特定の人物においてそれが発生したことを検討してきた。オリヤ・アイデンティティはこのような両義的、境界的な人物において提起された点に注目した。

ただし、本稿は特定の個人に現れたアイデンティティが核となり、集団的アイデンティティに転化していく過程に関しては検討していない。地方自治制度導入、教育制度の拡充、オリヤ人中間層の出現、ジャーナリズムの拡大、社会改革の推進、インド国民会議の設立、さらにはこれらすべてに接点のあったウトカル協会 (*Orissa Sabha*) の登場といった1880年代に至る一連の過程の中で、オリヤ・アイデンティティが強化され、集団的なものへと共有されるに至ったのである。またそれと同時に、言語、文化、歴史、民族の同一性を根拠に行政単位を要求するオリヤ・ナショナリズムが顕在化した。しかし、それは別稿で扱うべきテーマである。

本稿で述べてきた両義性の中からアイデンティティが想起したとする視点は、アイデンティティの強化の過程においても共有できる視座であろう。その後もオリヤなるものを理念化していった指導者たちは純粋なオリヤ人とは言いがたく、雑種的で両義的な位置にあったのである。こうしたオリヤ・アイデンティティの特殊性に規定されて展開していたのがオリヤ・ナショナリズムであることを、今後の論考において明らかにしていきたいと考えている。

参考文献

- Beames, J.
1870 On the Relation of the Uriya to the other Modern Aryan Languages, *Proceedings of the Asiatic Society*, June : 192-201.
1872a Notes on the Rasakallola, an Ancient Oriya Poem, *The Indian Antiquary*, 1 : 215-216 and 292-295.
1872b The Indigenous Literature of Orissa, *The Indian Antiquary*, 1 : 79-80.
1896 Notes on Akbar's Subahs, with reference to the Ain-I Akbari (No. 2, Orissa), *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 743-765.
1984 *Memoirs of a Bengal Civilian*, New Delhi : Manohar.
- Boulton, J. V.
1993 *Phakirmohana Senapati : His Life and Prose Fiction*, Bhubaneswar : Orissa Sahitya Akademi.
- Chesney, G.
1868 *Indian Polity : a View of the System of Administration in India*, London : Longmans, Green, and Co.
- Colebrook, H. T.
1808 On the Sanscrit and Pracrit Languages, *Asiatic Researches*, 7 : 199-231.
- Dash, G. N.
1993 *Oriya Bhasa-Surakhya Andolan*, Cuttack : Cuttack Students' Store.
- Dash, M. P.
1984 History of Early Oriya Printing, *Golden Jubilee Volume of the Orissa Historical Research Journal*, Bhubaneswar : Orissa State Museum : 192-200.
- Dhall, M.
1997 *The British Rule : Missionary Activities in Orissa*, New Delhi : Har-Anand Publications.
- Grierson, G. A. ed.
1903 *Linguistic Survey of India*, Vol. V-II, (rep. 1968 Delhi : Motilal Banarsidass).
- Habib, Irfan
1982 *An Atlas of the Mughal Empire*, New York, Oxford University Press.
- Hunter, W. W.
1872 *Orissa*, Vol. 1 & 2, London : Smith.
- Isaka, Riho
1999 The Construction of Gujarati Identity in the Late Nineteenth Century : Debates over Language, Literature and History, *The Memoirs of the Institute of Oriental Culture*, 137 : 233-255.
2000 Writings of History : the Notion of Gujarat and the Gujaratis in the Late Nineteenth Century, *The Memoirs of the Institute of Oriental Culture*, 139 : 298-273.
- Kittoe M.
1837 Kittoe's Note on the Khandgiri Inscription addressed to the Secretary, *Journal of Asiatic Society of Bengal*, 7 : 1075-80.
- Kulke, Hermann
2001 Historiography and Regional Identity : The Case of the Temple Chronicles of Puri. In Hermann Kulke and Burkhard Schnepel, eds., *Jagannath Revisited : Studing Society, Religion and the State in Orissa*. New Delhi : Manohar : 211-225.
- Lacey, W. C.
1864 *Nitibodh*, Calcutta : Calcutta School-book and Vernacular Literature Society's Press.
- Long, J.
1859a Selections from the Records of the Bengal Government No. 32 (Returns relating to publications in the Bengali language in 1857).
1859b Notes and Queries suggested by a Visit to Orissa in January 1859, *Journal of the Asiatic Society*, CCLXXIII (3) : 185-198.
- Maddox, S. L.

- 1920, *Final Report of the Survey and Settlement of the Province of Orissa : Temporarily Settled Areas, 1890 to 1900 A. D.*, Ranchi : Superintendent, Govt. Printing, Bihar and Orissa.
- Mahatab, H. chief ed.
1957 *History of the Freedom Movement in Orissa*, Vol. 2-3, Cuttack ; State Committee for Compilation of History of the Freedom Movement in Orissa.
- Mishra, B. B.
1998 *Religious Movements in Orissa (in Nineteenth Century)*, Jaipur : Publication Scheme.
- Mishra, P. K.
1979 *The Political History of Orissa : 1900-1936*, New Delhi : Oriental Publication.
1986 Growth of Oriya Nationalism- 1868-1921 In Binod S. Das, ed. *Glimpses of Orissa*, Calcutta, Punthi Pustak : 220-249.
- Mishra, S.
1977 Literary and Cultural Societies in the 19th Century Orissa, in M. N. Das, (ed.) *Sidelights on History and Culture of Orissa*, Cuttack, Vidyapuri 702-708.
- Mitra, R.
1870 Babu Rājendralāla Mitra offered the following remarks on Mr. Beames, *Proceedings of the Asiatic Society* : 201-216.
1875 & 1880 *The Antiquities of Orissa*, vol. I & II, Calcutta : Wyman & Co.
- Mohanty, B.
1989 *Odia Bhasa Andolan*, Cuttack : Friends Publishers.
- Mohanty, N.
1982 *Oriya Nationalism ; Quest for a United Orissa 1866-1936*, New Delhi : Manohar.
- Mohapatra, B. N.
1990 “The Politics of Oriya Nationalism 1903-1936”, Ph. D. Thesis, University of Oxford.
1996 Note on ‘Ways of Belonging’ : The *Kanchi Kaveri*, Legend and the Construction of Oriya Identity, *Studies in History*, 12 (1) : 203-221.
- Mohapatra, P.
1997 “The Making of a Cultural Identity- Language, Literature and Gender in Orissa in Late Nineteenth and Early Twentieth Centuries”, Ph. D. Thesis, University of London.
- Mukherjee, P.
1964 *History of Orissa in the 19th Century (Utkal University History of Orissa Vol. VI)*, Bhubaneswar : Utkal University.
1966 Promotion of Education in Orissa by Ravenshaw, *The Orissa Historical Research Journal*, 14 (2) : 21-32.
- Paggs, J.
1846 A History of the General Baptist Mission. In A. Sterling, *Orissa : Its Geography, Statistics, History, Religion, and Antiquities*, London, John Snow : 113-416.
- Pati, M.
1994 *Gourishankar Ray*, Calcutta : Sahitya Akademi.
- Patra, S. C.
1979 *Formation of the Province of Orissa : The Success of the First Linguistic Movement in India*, Calcutta : Punthi Pustak.
- Pattnaik, G.
1980 *The Famine and Some Aspects of the British Economic Policy in Orissa 1866-1905*, Cuttack : Vidyapuri.
- Pattnaik, S.
1961a Orissa in 1866, *The Orissa Historical Research Journal*, 9 (3 & 4) : 71-75.
1961b Orissa in 1867, *The Orissa Historical Research Journal*, 5 (1 & 2) : 61-73.
1962 Orissa in 1868, *The Orissa Historical Research Journal*, 5 (4) : 44-58.
1978 *Atharash Chasathi (Utkal Dipika)*, Cuttack : Friend Publisher.

Roth, M.

1920 *Utkal Patrika*, (rep. in Misra, A. ed. 1971, *Mrutyunjay Granthabali*, Cuttack : Cuttack Students' Store : 403-421).

1925 *Karmayogi Gaurisankar*, Cuttack : V. Kar, the Utkal Sahitya Press.

Roy, G. C.

1996 *Socio-Cultural Consequences of Colonial Mode of Education in Orissa*, Bhubaneswar : Ratneswar Publication.

Samal, J. K. & Nayak, P. K.

1996 *Makers of Modern Orissa : Contributions of some Leading Personalities of Orissa in the 2nd Half of the 19th Century*, New Delhi : Abhinav Publications.

Senapati, P.

1866a *Jiban Carit*, Calcutta : Baptist Mission Press (rep. in Giri, A. (ed.) 2000, *Fakiramo-hanank Durlabh Rachanabali*, Bhubaneswar : Orissa Sahitya Akademi : 1-63).

1866b *Utkal Saral Byakaran*, Calcutta : Baptist Mission Press (rep. in *Ibid* : 64-98).

1985 *My Times and I*, (transl. from Oriya by Boulton, J. V.) Bhubaneswar : Orissa Sahitya Akademi.

Sharma, M.

1986 *Odia Prakasn o Prasranar Itihas*, Cuttack : Grantha Mandir.

Shaw, G.

1977 The Cuttack Mission Press and Early Oriya Printing, *British Library Journal*, 3 (1) : 29-43.

Stirling, A.

1822 *Minute by the Secretary to the Commissioner*.

1825 An Account, Geographical, Statistical and Historical of Orissa Proper, or Cuttack, *Asiatic Researches*, 15 : 163-338.

Sutton, A.

1831 *An Introductory Grammar of the Oriya Language*, Calcutta : Baptist Mission Press.

1841-43 *An Oriya Dictionary* (three volume), Cuttack : Orissa Mission Press.

1844 *The First Lesson in Oriya, Addressed to Candidates for Missionary Labour in Orissa*, Cuttack : Orissa Mission Press.

1866 *Itihasa Sarasangraha*, part. 1, Calcutta : Calcutta School-Book Society.

Toynbee, G.

1873 *A Sketch of the History of Orissa (From 1803 to 1828)*, Calcutta, (rep. in *The Orissa Historical Research Journal*, 9 (1-2), 1960).

Wilkinson, J. G.

1837 *Manners and Customs of the Ancient Egyptians : Including their Private Life, Government, Laws, Art, Manufactures, Religions, and early History ; Derived from a Comparison of the Paintings, Sculptures, and Monuments still Existing*, London : J. Murray.

山田桂子

1994 「言語は民族を統合できるか：アーンドラ地方の民族主義」辛島昇編『ドラヴィダの世界 (インド入門II)』東京大学出版会, 429-441.

1999 「ローカル・インテリゲンチヤの歴史像：英領インドにおける歴史叙述と「批判の精神」」『歴史評論』585, 60-71.